



横浜港南台教会では子どもたちへの福音宣教として、「こどもの教会」の礼拝を捧げています。8月最後の日曜日の早朝、説教を「戦争がないことだけが平和なのか」という題で孫が担当いたしました。祖母の私にとっては、無邪気であどけなく可愛かった孫のイメージを払拭するのは大変なことです。けれども、このように、教会での奉仕を受け持ってくれたことに感謝を感じ

ずにはいられませんでした。選んだ聖書は自分の命名に因んだ箇所^(15節)からでした。

愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。¹⁵ **喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。**互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。「²⁰ **あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。**」悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。(ロマ 12:9)

彼は戦争の反語として平和を捉えるだけではなく、「衣食住」といった日常の暮らしが安心して穏やかであるという意味で「平和」を求めたいと話しました。彼は日雇い労働者の寄せ場である横浜の寿町の「夏祭り」や「越冬支援活動」に小学生の頃から父に連れられて行っていました。そこで見聞きする貧しさ、暴力、差別に心を痛めていたといいます。また高校生になって東日本大震災のボランティア活動に2回参加し、被災者と触れ合うチャンスが与えられました。住む場所を失い、見捨てられているような思いになっている人々を忘れない、そういう気持ちを彼なりに淡々と語りました。神に等しく愛されている者として、日々を支えあう「平和」を求めたいと言いました。

私自身は、戦争の只中に生まれ、家を焼かれ、逃げ惑いました。食糧不足、医療不足のため弟を失い、飢え、叔父が戦死、叔母家族が抑留など、戦争の惨禍を肌身に味わいました。戦後73年を経て、現在安心して穏やかに過ごしていることは本当に感謝です。二度と戦争はあってはならないと強く感じます。戦争を知らない孫の世代は、人間の命の尊厳を覚え、敬愛をもって接することが「平和」への道なのだと考えています。日常へのまなざし、身近な隣人への思いを大切にしています。

そういえば私の亡き母は幼い時に日曜学校に通い、祈ることを知りました。家庭不和を避けるために、アッシジの聖フランシスコのことは知らなかったけれども、神に「平和の道具とやらせてください」と必死に祈った、自分さえ我慢すればいいのだとよく話していたものでした。母の我慢(?)、忍耐は母を守り、さらに豊かな信仰の道へと導いてくれたと思います。母は、心に置いている聖句は20節であり、「神の愛の裁き」である燃える炭火に委ねていると言いました。

次の世代の孫たちが「平和」であるために、私も日常の暮らしにきちんと目を向けたいと思います。最近では児童虐待、非正規雇用による若者の貧困、ずさんなフクシマ労働者安全管理、止むことのないヘイトスピーチなどの差別発言、権力を持つ者の横暴、沖縄辺野古新基地建設による民意無視など、日常の「平和」を破壊する様々な事態が目の前に突き付けられています。平和に生きるために、**希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい**と示されたことを感謝します。